大阪大学グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」

夢はバラ色

小　泉　潤　二*

Global COE Program
"A Research Base for Conflict Studies in the Humanities"

Key Words：conflict, globalization, anthropology,international cooperation, human security

「グローバルCOEプログラム」は、「世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援する」事業として、文部科学省が平成19年度に開始したプログラムです。同年度には「生命科学」「化学、材料科学」「情報、電気、電子」「人文科学」「学際、複合、新領域」の５分野、平成20年度には「医学系」「数学、物理学、地球科学」「機械、土木、建築、その他工学」「社会科学」、「学際、複合、新領域」の５分野から、それぞれ12から14のプログラムが採択されました。「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」は、この中の「人文科学」のプログラムとして、平成19年６月に採択され活動を開始しました。文化人類学を中心に、言語学、哲学、芸術学、歴史学、社会学などの人文社会科学の諸分野、また教育学、国際協力学、人間開発学、人間の安全保障論などの実践分野が協働し、国際的な連携のもとに学際的プログラムが進められています。

ここでいう「コンフリクト」とは、急速にグローバル化が進む現代社会で顕著に、またきわめて広範にみられる社会的文化的コンフリクト、つまり集団の間の対立や紛争、摩擦や葛藤、緊張や矛盾や軋轢などを指します。私たちの日本を含めて世界各地には、「どこにでも」と言ってよいほどコンフリクトの問題が、複雑でさまざまなかたちで広がっています。人間の社会である以上、必然的なことであるかもしれません。コンフリクトの問題には、強い緊張をはらむ爆発的なものも、比較的穏やかなかたちで慢性的に持続するものもあります。急速に状況が変動し武力紛争のかたちで燃え上がるものも、長期にわたって潜在化と顕在化を繰り返す流動的なものもあります。このように多様で常時変動しつつあるコンフリクトの状況を、一般化し演繹的なアプローチで理解することは、少なくとも現在の時点ではできません。コンフリクトは人間に関わる問題であり、人間ほど複雑で多様で理解しがたい存在はありませんから、結局そこに法則性や普遍性を見出すことは不可能であるという考え方もあります。コンフリクトは、その内側に置かれている人々の思考や感情や行動によりもたらされるものであり、「民族の対立」「利害の対立」「宗教の対立」あるいは「階級の対立」など、単純化し図式化した説明はいろいろあるにしても、その説明の前提として使われる「分析概念に還元されている」（つまり分析になっていない）ことがあまりに多いと思われます。

私たちのグローバルCOEでは、まずコンフリクトを現実と実態に即して深く理解すること、演繹的なアプローチに対比されるものとしての経験的なアプローチを採ることを何より重視しています。そのためには日本を含む世界各地のコンフリクトの個別の事例を、経験的かつ具体的に把握することが出発点であり、したがって現地調査あるいはフィールドワークによる資料収集をとくに重視しています。コンフリクトの状況について個々の事例ごとに調査し検証し、世界各地で生きる人びとの視点と実践をいわば「現在進行形」のうちに捉え、現実を経験的かつダイナミックに把握することを目指しています。

*Junji KOIZUMI
1948年9月生
Ph.D., Anthropology, Stanford University, 1981（スタンフォード大学大学院 人類学博士課程修了 昭和56年）
現在、大阪大学　理事・副学長　人類学博士　文化人類学・中南米研究
TEL：06-6879-7002
FAX：06-6879-7007
E-mail：koizumi@hq.osaka-u.ac.jp

コンフリクトについて理解を進めると同時に、この問題に何らかのかたちで対処しそれを軽減あるいは緩和するための実際的な方策について探求することも課題になります。これが現代に生きる私たちにとって最も重要な課題の一つであることは間違いありません。コンフリクトは、人々の日常生活も知的生活も、産業活動も教育活動も含め、あらゆることを根本から揺るがし、ときにはすべてを破壊します。経済の発展、政治の安定、科学技術の展開も含めて私たちのあらゆる活動の基盤、そもそも人が生きるということの足元には、究極的には「価値」の違いに由来するコンフリクトの問題があります。

私たちの研究の理論的枠組みとして、1990年代に世界の冷戦構造が崩壊し、いわゆる「上からの」グローバル化が急速に進展したことに由来する「価値対立」の意味を重視しています。グローバル社会の構成要素が相互の関係を緊密化したことにより、そこに生起するコンフリクトの質も変化したと考えられます。従来からよく知られ、政治学や国際関係論の研究対象となってきた政治的軍事的コンフリクトや経済利害をめぐるコンフリクトばかりでなく、それらに加えて、民族的あるいはエスニックなコンフリクト、言語を基盤とするコンフリクト、芸術の所有や越境やアイデンティティに関するコンフリクト、各種イデオロギーのコンフリクト、宗教的信仰や実践に由来するコンフリクトなど、「価値」をめぐるコンフリクトが現代世界の最前面でますます目立つようになっています。こうした現代世界に生起しつつあるさまざまなコンフリクトについて、先端的かつ学際的な研究を推進するとともに、この研究分野の優秀な人材を養成することが「コンフリクトの人文学」の目的です。

本グローバルCOEプログラムは、2002年から5年間にわたって進められた21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」を継承するプログラムです。「インターフェイスの人文学」は、哲学者である鷲田清一現大阪大学総長を拠点リーダーとし、大学院文学研究科を基盤として進められました。「コンフリクトの人文学」は人間科学研究科を中核拠点とし、より明確にコンフリクトの問題に焦点を合わせて進められています。拠点リーダーの私と、サブリーダーで事務局長の栗本英世教授（グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）センター長）を中心に、人間科学研究科、文学研究科、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）の合計25名の教授が事業推進担当者となり、「トランスナショナリティ」「グローバリゼーション」「言語接触とコンフリクト」「人間の安全保障」「人道と人権」「コンフリクトと価値」「交錯するアートメディア」「横断するポピュラーカルチャー」という8つの問題領域に焦点を合わせ、学内外の多くの連携研究者とともに多数の研究プロジェクトを進めています。

当然ながら、優れた若手研究者を育成することも、このグローバルCOEプログラムの大きな目的です。拠点を形成するために、これまでに5人の特任助教と5人の特任研究員を、全国公募による厳しい選抜を経て採用しました。文化人類学、歴史学、文学、芸術学などの分野の若い優秀な研究者たちで、研究地域はアフリカ、地中海、東欧、ラテンアメリカ、アジアなどさまざまです。また、本プログラムは拠点である人間科学研究科と文学研究科に在籍する大学院生による現地調査を競争ベースで支援するなどの事業を通じて、ここにコンフリクトの人文学的研究の拠点を構築しようとしています。

拠点形成事業としての本プログラムを強力に推進しているのは、国内外の研究者を招いて頻繁に行われるセミナーやシンポジウムです。アバディーン大学教授で国際関係論の観点から開発や紛争を研究するMustapha Kamal Pasha氏、北東アフリカをベースに難民と社会構築について研究するオックスフォード大学教授のDavid Turton氏、ペルー・カトリック大学名誉学長で暴力の研究と人権擁護に努めているSalomón Lerner Febrés氏、ルワンダの民族紛争を自ら生き同国の国民和解に尽力しているAloisea Inyumba氏などの世界を代表する研究者や指導者たち、また若手の優れた研究者たちによるセミナーを、プログラム開始後の1年間で20回開催しました。

また「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」は、大規模な国際シンポジウムを幾度も主催し、「国際研究教育拠点」としての地位を固めつつあります。2008年3月12日－14日には、国際シンポジウム「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」を開催しました（図1参照）。ここで取り上げた「人間の安全保障human security」の概念は、「国家の安

図1

図2

全保障 national security」に対比されるもので、「恐怖からの自由」と「欠乏からの自由」を主張します。国家の安全というよりは一人一人の人間の安全を、紛争や貧困や病気や災害などの危険から守り保障しようとする考え方で、日本の外務省や国際協力機構（JICA）も重視しています。シンポジウム「グローバリゼーション、差異、人間の安全保障」は、この概念をテーマとして開催したシンポジウムとして、国際的にも例のない充実したものとなりました。ハーバード大学教授の Craig N. Murphy 氏をはじめ、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、トルコ、チリ、ネパールなど世界11カ国と日本から33名の代表的研究者を集め、グローバリゼーションの中での人間の安全保障について、３日間にわたる熱心な討議が行われました。

2008年８月には、国際シンポジウム「移動とアイデンティティ――コンフリクトと新たな地平」を開催しました。これはブラジルのサンパウロ大学と大阪大学の連携協力により、ブラジルへの日本移民百周年を記念して開催されたものです（図２・図３

図3

参照)。８月５日－７日にはブラジルのサンパウロで、８月24日－26日には日本の大阪で、それぞれシンポジウムの前半と後半を行いました。サンパウロでの前半には大阪大学側の研究者が招かれ、大阪での後半にはサンパウロ大学側の研究者が招かれました。主にブラジルと日本の間の移民をめぐる諸問題について、たいへん充実した討議が行われました。ちょうど100年前に神戸を発ってブラジルに渡り、地球の裏側でのきわめて厳しい生活状況の中で後のブラジル日系人社会を築き上げた人々について、地球の両側で二度のシンポジウムを開いてともに討議するということは、コンフリクトという問題を考える上で象徴的でした。この連携シンポジウムを契機に、大阪大学とサンパウロ大学は大学間協定を締結することになりました。

また、2008年７月11日－13日には、WCAA OSAKA 2008を開催しました。これは、本グローバルCOEプログラムと大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）の主催、国立民族学博物館と日本文化人類学会の共催、公益信託澁澤民族学振興基金とアメリカのウェンナー・グレン財団の後援により、人類学会世界協議会（WCAA －World Council of Anthropological Associations）の国際会議およびシンポジウム「コンフリクトと協力――現代世界における人類学の役割」が開かれたものです。世界各国の19の主要人類学会の会長・元会長が、この会議とシンポジウムのために集まりましたが、これは私自身が人類学会世界協議会の代表幹事・会長であることから実現したものです。７月11日－12日に集中的な討議を行った後、国立民族学博物館館長と日本文化人類学会会長らが加わってワークショップが行われました。最終日の７月13日に開かれたシンポジウムでは、現代世界のコンフリクトに各学会が連携して共に取り組み、世界の人類学会の間に協力関係を築いていくことが合意されました。

こうしたシンポジウムやセミナーは、2007年４月に大阪大学に設置されたグローバルコラボレーションセンター（略称GLOCOL http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/index.html、本誌Vol. 60, No. 1, 2008年新春号の「大阪大学グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）の新設」で紹介）と本グローバルCOEプログラムとの密接な協力関係のもとで進められています。GLOCOLは大阪大学においてグローバルコラボレーション、つまり国際協力に関する研究を推進し教育プログラムを開発し実践活動を支援するために組織されたセンターです。文系・理系を問わず国際協力を進め国際貢献を目指すGLOCOLの活動と、人文社会科学から国際的な紛争や軋轢の分析に取り組む「コンフリクトの人文学」の活動とは、表裏一体の関係にあります。ともに協力して現代世界の現実を科学的研究により明らかにし、問題の軽減に向けて働きかけようとしています。

本グローバルCOEプログラムについて、詳細はhttp://gcoe.hus.osaka-u.ac.jp/ に掲載されていますのでご参照ください。